甲越五戰記考証　一

戰記

内閣文庫		
番號	和　33604	
冊數	6（1）	
函號	169	80

書　和　三三六四　五冊　號

169-80

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

序

川中島五戰記者何。甲越兩公之紀事也。紀事者史之變也。記以紀事。有其事。故有其記也。無其事。必無其記也。今其記有事。事則在川中島。故名之曰川中島五戰記。紀事曷爲謂之史之變。大史遺

日本政府圖書

其籍。宗國墜其徴。是以史變而紀事之學興焉。所謂記一方郡國之事。故謂之紀事。行長氏之平家物語。僧玄恵之太平記。皆紀事也。令夫分符竹賜茅土。則一方民之主也。而其成敗得失。訓戒約束。決大事。定大議。與指麾號令遺風

餘烈。非有紀事。則安得傳稱於後世乎。兩公是名一方民之主。而一世之雄也。而其本事亦在于川中島。若夫不生今日之世界。而生二百年以前之世界。則不知有兩公之英雄。又不知有川中島之偉事已。不知有之。又何紀事之

有前有記之者。又有錄之者。未足悉於兩公之事。村上抱一卿生淸門之家。世爲信濃之人。川中島之役。皆出於甚祖先羽林公之身事。是以善悉兩公之本事。即今家臣出浦氏記其事。其記莫偉於出浦氏之記。

其事莫偉於川中島之事。記與事已偉矣。取已偉之記而閱已偉之事。則生今日之世界。而讀二百年以前之紀事者也。善讀之。則留手作一部之太平記。君甚問諸村上君。以爲然乎否。時庚申之冬孟第三日。

夜雨瀟然。篝火課記。

綾瀬亀田頼之識

橋条書

甲越五戦記攷正序

余少讀歴史、尋古今成敗之蹟、毎聴越公之遺風餘烈、未嘗不躍然而喜慨然而歎焉、其所以喜之者、公之用武於川中島、目中已無甲、談笑拉十萬之衆、甲人不敢再飲馬於犀川、其英邁豈非可喜哉、其所以

歎之者、街術貪祿之徒、巧其言没其實、而作之書、以貴已流、況如甲陽軍鑑、嫁名於高坂氏、川中島之五戰、皆與贏於甲、其誣英雄欺後世者、不尠矣、其寃埋豈非可嘆哉、夫戎馬𩣺驄之間、所貴者非才也氣也、斯氣也能讀書萬卷而善然也、

古有嵒棲洞巢之士而抱轉世長民之手段者、一時應帝王之聘顧、出佐天子、號令賞罰討、施諸明堂一法、每出、為天下萬世之憲典、而其人平日所讀者果何書乎、未有知之可讀、則圯上一篇足為王者師、然則讀書萬卷、倉卒之間、不得使斯

氣、何貴多哉、是以天生斯人、
則亦假斯衆、而千古式一人
而已、
皇朝應仁之末、足利氏失其政、羣
雄輩出、魁士蜂簇、而天以斯
氣獨與越公一人而已矣、越公
少長鍪管間、讀書無暇、而西
越歉國、入於京師、東渉八州、謂
於鎌倉、十萬馬蹄、蹴北條氏之
城池、一介義言、挫織田氏之頭角、
而其區畫排置、出於時輩羣
雄之上、則是非善使斯氣者耶、
嗚呼越公之英氣偉績、實足為
百世用兵之鑑矣、曰令家臣出
浦清命錄公之用武之本事、
始末、并余先君羽林公之軍事

始於戸石之役、終於川中嶋五戰、名曰甲越五戰考正、合為五巻、即命劂氏、公之於世、而諸書所載、年外謬妄之説、悉皆芟剔、其立論引証、按之地圖、照之家譜、以質其謬、庶幾後世與余同志者、因此書以談古今成敗得失之蹟、而見越公之

遺風餘烈、則亦不為無小補也、然則清命之有功斯書、非可小視者也云爾、

寛政庚申之冬仲

更級少將村上左衛門佐八世孫

源義處謹識於荏土駿臺之寓居

亀山織太素書

甲越五戦考正　目次

巻の一

総論

巻の二

武田信玄兵を率して信州に来り戸石の城を囲む村上羽林兵を出して是を援ふ信玄と戦ひ大ひに軍を破る

武田信玄戸石の城を抜て兵を常田に移す村上羽林之を怒て兵を出して再ひ信玄と戦ふ

村上羽林大軍を出して武田信玄と上田原に戦ふ

越軍おゝいに後を返し高梨政頼が居城に入て是
を援羽林自ら越軍に適ひ長尾景虎の師と云ふ

巻の二

長尾景虎村上羽林の為に兵を率して信州
小県の羽林もまた兵を出して武田信玄と[illegible]の
原に戦ひ大に其軍を破る

長尾景虎村上羽林と倶に兵を出して武田信
玄と川中島に戦ひ大に其軍を破る

巻の三

長尾景虎村上羽林の為に兵を帥して陣営を

戸神山に陣す武田信玄と川中島に戦ふ
長尾景虎村上羽林相倶に兵を出して武田信玄
と川中島に戦ふ

巻の四

上杉謙信上洛して将軍家に謁し関東管領職
を譲る
上杉謙信兵を帥して関東の所々に戦ひ且自ら剃髪
[illegible]を誅す
武田信玄兵を率して川中島より村上家の運
場を放火し長沼の城を攻む

上杉謙信公を助して関東の諸城を抜く

上杉謙信大軍を率して小田原氏康が居城小田原をとりかこむ

武田信玄公を率し来て海津の城に入りて先陣

所々の村上家の旧士等を害す

上杉謙信村上羽林父子が術に大軍を出し陣

営を妻女山に設け武田信玄と川中島に戦ふ

足利大樹書を上杉謙信に贈る

上杉謙信村上羽林父子公を率して武田信玄

と川中島にあひ戦ひ拙て緒をて先公をたをさむ

附言

一 一の巻ハ甲陽の記の歴代に齟齬せるを正し

ても古戦ハ浮虚妄誕多く又ハ偽文も交はり

因て是を刪り正し是非を分って后人

の惑ひを解かんとする事を欲す

一 二の巻より三ハ予が旧君村上羽林并に上田

原戸石の役并に越の謙信に援兵をこふの事

等を記す是皆先人旧不の遺書偽説に拠って或ハ

古参所は識記の戦記に原づき又はつり合せ

場に至りての方角を正して是を間違す

今や悉く地理を正し務も私意を交へ又ある
ときも平穏人の不抜なるハ深き事もあり
かん文知るさる所ハ猶明かにして将帥の君子を
俟つといふ

信陽阪城隠士
寛政十一年己未仲冬 出浦源清命記

甲越五戦記考正 巻之一

出浦正清命輯

総論

今来古往備して鈞卿て家ある興廃ありしかれ
ば武田上杉川中島合戦の勝負をえず一朝一夕の故よ
あらず其の起り源ふ久し中陽の武田信玄属隣国を
侵しひいて信濃ニ及び小笠原諏方の不和を探奪し
また村上家を滅し其の封疆を掌握せんとを欲
て玄公ハ兵刃を接ゆること止時なしはまて文の末ニ及で
益争ひて其の志を継ぎ其の記録今ニ遺
て世よりいふといへども其の説紛錯ハ所あり

是を讃歎に及ぶといへども先人の著する所の遺書伝説は
よつてその是非を折衷し誤まる所の虚妄を弁ん
因て先甲陽軍鑑の説を挙てその違へるを正す
此記に曰天文十五年三月の事なるに甲陽の大軍信
州より海野口を発入して戸石の城をとりかこむ
城主は大におそれて急を告しよしと更級郡の
村上兵部義清に告しこれを聴て一万余を卒て
戸石の城を援ん城主これが力を得て忽ち城
を出籠城甲陽の後軍に対戦し夾み撃て忽ちその囲
中ず甲陽の兵潰て戦ふて一へとも利のうしなして

大に屈するところなくして先陣の将甘利横田備中
を始めとしてその外究竟の勇士数多戦死し村上の
先鋒楽巌寺入道等を機に乗じ競ひすゝんで
甲陽の中軍にわけ入るこゝにおいて甲陽の兵大いに狼狽
して動揺へいき術を失ひ士卒皆混乱
信玄が危急既に一挙にせまりけるを
山本道鬼斎勘介後詰をなして
て窓に回転して村上が勢を前面にうけ甲陽の
兵を引て大いに采を振て戦ひ村上が勢
小利を得て後其信玄を制し

下知して是を追ひ首を擒ること一百五十余級村上義清遂に没落す信玄大いによろこんでその翌年天文十六年の秋八月すゑ大軍を発して戸石の辺を放火し遂に上田原に入る村上義清大いに怒て兵八千余を率して信玄とおほいに戦ひ忽ち甲州の先陣を破る義清も亦みづから敵を当て接戦すること既十余合せし時に甲州の後陣大に崩れ没落し義清歩卒士卒を從ひ信玄に向ひてまさに必とせしが甲州の兵是をさゝへて信玄を助て義清と戦ふ義清の兵士もすさ

五千騎は池がはらを援て頻に進で甲州の先陣に当しが信玄ふたゝび是を撃て是を擾すこと甚多くしてはいかゞ村上の軍遂に没落し義清も越後に奔て長尾景虎入道謙信に依る時に義清謙信に言て曰く公の勇を借り信玄が頭を斬て汚辱を雪んことを請ふ謙信これを聞て曰く信玄が為に所地を棄る事豈に擯斥を受る時に至りて是を辞するは義士の志とする所にあらずとて速に是を承諾しておほく謙信数ケ所を辞して信州に出張し海野平にはじめて十余度の合戦甲越の両家河

中嶋に於て對陣ある事の數度に及へりと雖も雌雄を
決せず兵を動かさず然ども先鋒の列士あるより合戰に及
のこりの後永禄四年九月上杉謙信村上義清を先とし
兵一万三千余を卒して信州に入り川中嶋を渡りつく
西条山に陣営を設く武田信玄是をきいて兵二万
八千余を帥して信州に入り海津の城に籠營て信
玄陣營にて計策を設け兵一万余をもちて西条山
に向ひ攻むるの手八千余人を以て河中嶋へ陣取り
出せしは謙信かくはかりごとを察し同時に兩の夜の渡り
を越え縄矢に舟を渡して朝霧の晴間を待つ明ぼの九月

十日の黎明に及んで越兵の兵八千余人車がかりの術を
用ひ甲州の先陣を破る甲州の兵悉く防ぎ戰ふと
いへども不意を伐れてさゝへかね其の中軍武田
典厩左馬之助信繁討死諸角豊後山本道鬼等の
勢ひ遂に戰死して信玄の左右に討死の士
の老将兵に屈強甲陰の侍を笑ひ枕
くして打笑し英氣すこしも屈せん依ひよく散
然るに巳時にいたつて謙信しづかに士卒
にひきゐて甲州の大軍をおつて信玄を追ひ
謙信の太刀さんざんするどくして電光のごとし

信玄更に疲れざるとさへ謙信の軍陣をそなへけり流
石の謙信もいかゞはせんとおもひしところ一戦の甲
州の勇士すゝむとみえて後を抜けて謙信を推へ支へ
てこれを働かく謙信大に忿怒して競ひ戦へと
いへども衆寡なるを如何ともし難く終に退く
甲州の兵勢に乗じて追ひかくる謙信の兵防ぎ
戦ふもしがたく大に崩れて犀川筑摩の二流に溺
れ溺死するもの凡一万余人信玄勢に乗じて士卒を励
まし追撃してその首を獲ること一万余なりしといふ
かくて越後の兵道に没落して謙信さまざまに和睦

越後衆一人も残らず討取りしとぞ扨ても此一戦の
ごとき越後方の兵は居城にいたりて和睦
越後衆を謀略にはかりてその日の恥をそゝぎかくさん
とおもふところに上杉の浪人海野に鋒を交へ
及ばずしてついに上杉を攻むる甲州勢は坂
弓矢の自讃の説によりて他人の偏作に出づるの戯
なしその中いかんとなれば当時第一の勇士第二
の勇士に天正三年乙亥記にしるす処の二の書の中
に松永弾正久秀が多門の城にて滅亡せしことを
載せり按ずるに久秀が滅亡は天正五年のことにして

笠澄に兆せる暦代より始三年のことなり甲陽の徒
これなる笠を考へるのいれなしとおいてそれを考
へバ甲陽笠澄ハ諸人の説ハかるる疑なり又第九
の戸ア天文十六年二月十四日武田信玄諏訪とお具し
八幡の社来の朱ありての信玄勢の信玄ハ流て同
国府の大なる大門の出陣ハ長門のまちくかのる
陶甲賀がとまに戦せらるとしけりさしらる渓達
てとかすると大門兵陣の滅亡ハ天文二十年九月終ら
のうえとて笠澄と云へる暦代に説く五年の遠ふ
かうラ戸が當君村上羽林の戸石合戦も天文十五

年二月のことなりけり上田原の戦ハ天文十六年八月
ふハりうる武田晴信ふる道へ戸石上田原ともまた天文
二十二年二月のうちして甲陽笠澄よハふるりのち
七年のうちへ上にて吉の流來いうてらる東郷と記る
ものとして弘化よハ不二世の内の一とおいて人を郷ゆり
すまるへし萬代用すへかんやとおいて考まハ
波多ハ高坂深志らまとう書さるる明りかり且戸
石の合戦に山本勘介流角兵後の流説に信玄の
兵五百余を回らし戸石の後へまで村上勢を南
面に向しむしくれもる、撰え地理によらずこさが

也へ分り村上家の軍勢ハ始終より菊まに面
てはきり信玄が去戸石の城のうしろへ出
しといふハ甚大なる謬説なり今地理を以
考ふるに戸石のうしろへハ険絶にして人
の至ることハあるべからざる地なり是全く
軍鑑の撰者推量をもつて己が云を飾りて
人を惑はすものなるべしまさに甲陽軍鑑
合戦のさまに云るところ飯富兵部板垣
駿河小山田備中守の銘々名実東路を
御ふせご式ハ伊奈家の豪士等を押へんが為

而して向ひのまへハ信玄が戸石の城攻ハ小勢にて
て危き合戦なるよしといへども世俗の不
書すけるところなりして妄説も亦
信玄合戦ヌに飯富兵部板垣駿河小山田ハ首級多
鎗働して信玄が先鋒にて甚しく防ぎ
戦ふといへども利なくして遂に敗走しけるを
よりまこても記に曰天文十九年ハおほふくどう歴代鉅鈔のこ
信州戸石の合戦の時甘利備中守旗本より
検使の横田備中守討死也（甲陽合戦考に甘利備中 横田備中が討死しぬ）
是をしらずの士弐ハ従来偏卒まてるところの場と一寸も違ハ
ぬと出けり是亦妄説なり信玄全集に悉皆実なるの云ふ

しさハ一寸も退かんしと云へハ同十六年の春ハ井上村
に妾なかりし娘ありけし
上家党の足軽大将小笠原をなと組ありて源五
を討とらしむ退くへきを横田が後同心しとも死せう
会よ丹人をありて負死人を出す是れ海津に返し合
もらし戦ふ時一入かすく討まとめ此合戦ハ信玄
公の負なりと山本勘助しか後度に候しつ人切也と
待して諸角豊後小山田備中日向大和今井伊勢の
勢をはしまり返し敵を三百二十余討取る是居
と謂へかくハ戸石崩れとして此合戦ハ大方不利の
なましも懐を取つ鉾を分かりし是信玄の

衛ありけしこと 戸石崩れといふ事なり師云しる もし妾中すまさらに戸石崩れとしいふ
し豈こくよ我やんやみまよらく
こまとこころハ戸石の役ハ信玄大敗なりと明らかなり甲陽軍鑑
の虚妄なりしるかくのことし上天文十
七年より同廿一年よ至るまて五年かる
小越の長尾謙信村上義清のさ代ふよ名を信
玄よ出し信玄しお戦ふよし哉せつき守よ
おまると挿するよて又十六年の秋村上義清
の軍破まて小越の謙信を恃むのよしと
述るかゆへよての云と符合さきんがさあい
えある不の排蒙を遠ひの流すしてされ突飛

倍之ハまして考へさるの後所なり今そその
出世より世といへども證拠とする
よしなきかしかくのこし
跡をあらはり思ひといへバしてその非を
我世あら不徳くこをいへりをさら謙正が身
ましてよとを誹謗するハなきに何の心ぞや
らし謙正が作る不なるハ差いへらましさ
こしなりおくを以てその者の謙正より
信さらるすとらへしあらハ信玄が行
状後世の亀鑑しせんがらんあくるや是

又信くよたらハ信玄の人となりハ剛勇
なりしえへしも義とちらのおくろなし及
を学ひしへしもおれを仰く以て仁総
ハ乙も又信虎を放ち己が志を逞
擬よ人の主を奪んてしを殺し諂言
執義を害するのその不孝不義貪欲暴
逆なりしかそのもる帷なし筆證ます
すてまその非をのぞりかるを況や
他人よわかくまいを誹謗せざらんや然
まとも彼方を信するものも又おきいりなき

国立公文書館
National Archives of Japan

偽文ましく考へさるの後所なり今その書が世よ出りといへとも批拠するに足らざるなし然るに信玄が行跡をしるしたり然といへども其の非を載せざるは不徳のことなり是によつて浮正が身にして上と誹謗するは甚に何の心ぞやらし浮正が作る不なるは是れは何のまきさことなりとも之を以て其の書の浮正よりいでさるとうつへしあらは信玄が行書さるとも伏滲世の亀鑑しもんがらなんぞあるや是

又佞くはたらく信玄の人となりは剛才なりといへとも義をしらざるのおもむきなれは篤を掌にしといへとも思ふまゝに好みて鉄いはんや又信虎を放ち己が志を遂すし擬つまよ人の国を奪んとしては殺し諸方礼義を害するのそのふ孝ふ義貪欲暴逆なることかぞふるに暇なし筆端にすべすてよその非をのぞきりおのれを況や他人よたれかくおよびを誹謗せざらんや於是しも彼書を信ずるものも又おもひけるを

かゝる人なれバ文字が海する不足を見るに益
なし識なるまゝバ討するに及バん惑をし
のあるれバ毎するに及バん今やむしとぬ
すしてその梗概とのべ竊に淫論とく
まふかりしいへとも字を査らう編小の言
仏はせまて学問をよも性戯にして
菽麦と毎ざさしバ文辞のよまゐて浮り
まつともあしうへん行まゞバ引その言も
亦きく遠ひのうへん頒字頒よへ十年来よ
して恨耳杳冥ふやのうへんらまゞもまき

労しぬるまでバ同志の君子明鑑のうへん事
を庶幾する而已

追加

上田原より　葛尾まで三里　川中嶋まで八里
葛尾より小県まで山まで行程二十五里
芋川より春日山まで十二里余
村上羽林上田原の営破れて芋川の塁に
入る七十余日にして後ち羽林自ら小県
より適ニさ長尾輝虎に援を乞ふ
川中嶋より春日山まで二十里

甲越五戦考正　綱詳　一之巻

甲越五戦考正　巻之壱終

慶應乙丑

国立公文書館
National Archives of Japan